

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24510391

研究課題名(和文)戦後日本映画にみる銃後の女性像：メディアによる戦争責任過程1950年-2010年

研究課題名(英文)Women at home-front: the image-making through war films in postwar Japan and its impact on the understanding of Japan's war responsibility

研究代表者

吉田 香織 (YOSHIDA, Kaori)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：00550386

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究で日本の戦争映画に描かれる女性は、銃後において苦しむことで「女性＝被害者＝日本」を強調するか、「従軍看護婦」「電話交換手」として兵士と共に戦うなど、戦いにおいてむしろ積極的に貢献する(加害者役割を示唆する)役割をもつことが明らかにされた。女性中心の映画、レビュー、そのコンテキストの分析結果は、後者の場合、戦場にいるのは「他者」とされる辺境(沖縄・サハリン)の女性であり、「本土」女性は「被害者」の立場を強調する。戦争記憶の言説のなかで、ナラティブを通し女性の主体が妥協・調整・交渉され記憶は構築される。記憶の女性化は、戦後日本における戦争物語に対する支配的(男性的)な欲望と共存するのである。

研究成果の概要(英文)：This project, through analyzing Japanese war films, their reviews, and their contexts, elucidates that women depicted in war films in postwar Japan play the following two roles in the memory-making of World War II: 1) stressing the formula of "woman = victim = Japan" by suffering from war atrocity at home front, or 2) fighting with male soldiers at the battlefield as war nurses or phone operators, suggesting their active involvement in the war as victimizers. In the latter case, the fighting women are "the Other" (Okinawa and Sakhalin) distinguished from the "proper Japanese women" in the mainland (Japan's Self) who stress Japan's role as the victim. In the discourse of war memory, mediated narratives have shaped gendered war memories by compromising, regulating, and negotiating the subject of women. The feminization of war memory co-exists with the masculine/dominant desire toward the nation's war narrative in postwar Japan.

研究分野：メディア研究、比較文化研究

キーワード：戦争の記憶とメディア 日本戦争映画と戦争の記憶 メディアと記憶のジェンダー化 女性と戦争メディア 戦争マンガと記憶の構築

### 1. 研究開始当初の背景

日本のフェミニズムは、国内外の事情との絡み合いの中で改めてその基本理念と目的が問い直されている。その主な要因として挙げられるのは、近年の戦争のかたちの変化とそれに伴う軍隊の在り方の変容、過去の戦争における女性の位置づけについての再検討である。1980年代末から2000年代にかけて多くの学者(Enloe 2000, 大越 1998, Elshutain 1987)が第二次大戦、ヴェトナム戦争、湾岸戦争などについて再考し、ジェンダーの概念が戦争や軍事化の意義を大きく左右することを明らかにしてきた。さらに、戦争が「家父長制を維持する暴力装置」(若桑 2005)と再定義され、戦争の原因としてこれまで考えられてきたものがジェンダーという観点から検討された結果、「戦争=男性、平和=女性」の神話性が露呈した。この点において加納美紀代ら(2004)は、これまで不問であった戦時女性の戦争責任を追及するため、銃後の女性の加害者としての役割とその過程を明らかにした。

日本はアジアにおける慰安婦問題、靖国問題、非日本人被爆者への保障問題などが未解決のまま、新たに湾岸戦争における対応への非難と国際テロ問題への対応など大きな課題に直面している。この状況下、男女平等参画が躍進する一方、軍事に関わるジェンダー認識については逆行しているかに見える。例えば、2004年から憲法24条(婚姻・家族における両性平等の規定)と9条(戦争放棄)の改正が深刻に議論され始めたが、この改正論は9条が「国から戦争と軍隊を奪い」、24条が「男らしさ」と「女らしさ」を失わせたという信念に基づいている(中里見 2005)。

戦争に関わる神話の構築と浸透は、メディアに因るところが大きい。このことは、多くの戦時プロパガンダの効果についての研究(Dower 1987)が明らかにしてきた。Napier(2005)は日本の反戦アニメが苦しむ子供を描くことで「日本=被害者」史観を濃くし、加害者としての記憶を希薄にすると指摘する。

しかしながら、メディア研究において、戦後日本のメディアがどのように戦争とジェンダーに関わるイデオロギーや公的記憶を形成してきたかについての包括的且つ綿密な分析と議論は十分になされていない。例えば、これまでの戦争映画研究の多くは、主役男性のヒロイズムに焦点をあて、女性登場人物については量的・質的にも限られている(佐藤 2000)。女性登場人物の役割の重要性、戦争映画に女性が描かれることが少ないという事実自体についての議論は軽視され、さらに女性が主役の日本の戦争映画を分析した研究は数的にも質的にも未発達である。

### 2. 研究の目的

本研究は、これまでメディア研究が軽視してきた戦後日本の戦争映画における銃後の

女性像についての綿密なテキスト分析と、これらの作品の受容についての調査分析、社会背景の分析、さらに映画の解釈に一役かう戦争博物館の構造と意図を社会的コンテクストとして分析対象として組合せ、メディアを通じた戦争の記憶構築の中で「被害者」としての女性像がいかんして作られてきたかを包括的に検証し、銃後女性の戦争責任を解明しようとする初めての試みである。戦争博物館などを分析対象にした理由は、映画作品のテキストを女性の戦争責任という観点から解釈する過程において、例えばオーディエンスが映画作品理解のために背景となった場所や戦争博物館を訪れたりしながら同時に戦争の記憶構築のコンテクストとして少なからず影響を与えていると考えるからである。

また、実写映画が中心ではあるが、メディア作品の解釈には *intertextuality* という語が示すようにテキスト間・メディア間での相互作用も重要であるため、マンガ・アニメなどの戦争メディア作品についての先行研究、そしてこれらのメディアもテキスト分析の対象に加えることも考える。

さらに、日本の戦争映画における銃後女性を分析・解釈するにあたり、その特徴を明確にするため、韓国・アメリカの同ジャンルの作品を比較分析する。この背景には、国際社会で軍事態勢のあり方を問われる中で、ジェンダー意識を改革してきた日本のフェミニズムが「男女平等」を再定義する必要に直面している状況がある。

それぞれの研究段階において学会発表での意見交換を行い、受けたフィードバックを踏まえ論文・著書を執筆し研究成果報告することを本研究の最終段階とする。

### 3. 研究の方法

本研究は以下の5部に分けられる：戦争映画研究の先行研究批評、理論的枠組みの構想、テキスト分析：日本・韓国・アメリカで戦後制作された銃後テーマの映画・マンガの収集、各作品の綿密な分析、映画の受容について雑誌・新聞のレビューから考察、社会的コンテクストの分析：日本・韓国・アメリカにおける戦争博物館・資料館の観察、これらの施設の関係者へのインタビューと考察。

具体的には、戦争メディア(映画・マンガ)と過去の戦争理解についての先行研究(理論・方法論を含む)を踏まえ、日本の戦後メディアは女性を戦争責任から回避させる記憶を構築してきたのかという疑問について、銃後をテーマとした作品を綿密にテキスト分析する。同時に、それらの作品がどのように受容されたかを広告やレビューを調べ検証する。さらに、戦争博物館・施設の観察調査を行い、構造・ディスプレイを分析しメッセージや意図を解釈する。以上の全側面を総合的にみとうえで、戦争メディアが女性と戦

争の関わりの物語づくりの一要素としてどのようなメカニズムによりどのように機能しているかを明確にし議論する。

また、分析の論点をより明確にするために、他国の同じジャンルのメディア作品について比較分析する。一つは戦時日本により被害国となった韓国の戦争映画作品とそれらの受容についての分析、そして戦争博物館などの観察、館長へのインタビューを行い、この社会的背景を議論の要素として取入れる。さらに、日本と異なり、女性の軍事的参加を奨励したアメリカの戦後戦争映画における女性像の分析と戦争博物館の観察を行う。二国がどのように女性の戦争責任を扱ってきたのかと比較することで、日本の女性と戦争の関わりをより明確にする。

#### 4. 研究成果

<戦争映画のテキスト・受容分析による戦争の記憶のジェンダー化メカニズムについて>

女性表象に関わる作品、特に戦争映画と戦争マンガのテキスト分析を行うにあたり、主にアメリカの戦争映画、反戦アニメ・マンガ、そして戦争とジェンダーに関わる表象についてのこれまでの先行研究の批評・再検討をかなり幅広く行った。理論的枠組み・方法論については、1) 女性の戦争論、2) イメージ分析、3) 国家とジェンダー、4) 精神分析に関わる幾つかの結びつきのある概念を追究し、徹底した枠組みを作ることができた。

対象作品となる戦争映画(実写)と戦争マンガを上記の理論と方法論を利用し、テキスト分析を行った。これらの分析結果は、中間的成果のフィードバックを得るため、まず初年度の2012年にカナダのプリティッシュ・コロンビア大学にて研究会と報告会を行った。引き続き、国内外において、実写映画とマンガ両方のテキスト・コンテキスト分析について招待講演と報告発表を行い、方法論やその他の改良点についてのディスカッションに基づき、改良点について有効なフィードバックをもらい、意見交換ができた。

日本の戦争映画で描かれる、戦争における女性の役割は、1) 銃後において苦しむことで「女性=被害者=日本」を強調する、の他に、2) 戦場にて「従軍看護婦」「電話交換手」等として兵士と共に戦うなどして、むしろ戦いにおいて積極的に貢献する(「加害者」役割を示唆する)役割をもつと解釈することができる。ただし、テキスト分析によると、後者の場合、戦場にいるのは日本の戦中・戦後において「他者」とされる辺境(沖縄・サハリン)の女性であった。日本本土という「適正な」場所にいる女性は銃後での「被害者」の立場を強調するものが大部分であった。(主に『ひめゆりの塔』複数バージョン、『霧の火』『樺太 1945 年夏 氷雪の門』の分析より)

これらの映画作品の分析により、国内外における背景・戦争言説のなかで、フィクション戦争映画のナラティブが、いかに女性の主体が妥協・調整、あるいは交渉のうえ構築されていくのに大きな役割を果たしているかが明確になった。戦争の記憶の女性化は、戦後日本における戦争言説(物語)に対する支配的(男性的)な欲望と共存するものであることが、戦後日本の戦争映画(女性主役・男性主役もの両方において)のテキスト分析、映画レビュー、歴史・文化的コンテキスト分析の組合せにより明らかになった。

<戦争映画にみる戦争記憶構築の言説における少女(性)の役割>

実写の戦争映画は実際の人間(俳優)が演じるため、マンガや小説のメディアと異なり、被爆者差別を避けるためにケロイドやグロテスクな怪我そのものを描写しない傾向がある。従ってその悲惨さを伝えるために「原爆乙女」と言われる、苦悩する「少女(性)」を描く手法をとることが分かった。

このメディア表象手法を詳しく理解するため、反戦映画に「原爆乙女」として多く起用されてきた吉永小百合主役でこのジャンルの代表作『愛と死の記録』『夢千代日記』の分析・解釈を行った。

以上の分析の結果は、これらの映画が少女を中心とした表象・ナラティブ構造を通して、清純・貞操の概念を強調し原爆のために苦悩し翻弄される少女の姿にスポットをあて反戦・平和を喚起させることを優先させるメカニズムを明確にした。さらに重要なのは、このメカニズムが皮肉にも結果的に、戦時日本の他国に対する暴力を見えにくくさせ、国レベルで戦争についての「記憶喪失」を実現させる言説と構造の維持に大きく関わることとなったということである。

<日本の戦争マンガと戦争の記憶の女性化について>

女性マンガ研究分野の戦争言説を分析することにより、第一に他のメディア(映画や文学)に見られるように、母親(もしくは母親の役割を果たす他の女性)から娘に戦争体験が伝わる物語性が見られることが分かった。これらの「母親」は信念を持って逞しく戦争を生き抜いた女性像を表象しており、精神分析学の分野で言及される「母親と娘の絆」の類型に当てはまる。また、構造的観点からみると、マンガでは戦争をメディアミックス(例 実写や写真を挿入する)で語る例が顕著に見られ、マンガスタイルだけで語られる場合と、メディアミックスで語られる場合の比較研究により、マンガ独自による「戦争」物語の特徴を把握することができた。また、戦争を主題とした女性マンガでは「加害者」としての日本が描かれている作品が限られているが、作品の中には「慰安婦問題」や中国大陸における日本軍の暗躍などを描い

ているものもあった。しかしながら、ロマンチック・ナラティブを主題とする女性マンガではあくまでもこれらの負の歴史は物語をドラマティックにするためのサブテキストとしての作用でしかないことが分析からわかった。

さらに、少年マンガにおける戦争言説の分析により、このジャンルのマンガは様々な見解による異なる戦争の記憶を構築する可能性をもっていることが分かった。例えば、小林よしのりの『戦争論』に表される歴史修正主義的見解から、中沢啓治の『はだしのゲン』にみられる日本国内外から引き起こされた戦時残虐行為に対する直接的な批判見解、そして、水木しげるの一連の戦争マンガシリーズのマンガ表現法とナラティブ構成を通して、日本のアジアに対する戦争責任を指摘すると同時に国家愛が共存する「in-between」空間の形成が提示されていることが明らかになった。

<戦争映画による記憶構築のコンテキストとしての戦争博物館の調査分析について>

もう一つの大きなテーマ、戦争博物館と戦争の記憶の言説の絡み合いについての調査研究においては、2012年度に映画テキスト分析の研究発表を行った際に、解釈においてコンテキストをみるべきだと指摘があり、その必要性を重要視し、日本国内の戦争博物館の調査見学を行った（沖縄県平和記念資料館、ひめゆりの塔平和祈念資料館、東京：女性の戦争博物館、遊就館、昭和館、那須戦争博物館）。うち幾つかにおいて、館長・関係者のインタビューあるいは講演会への参加をし、関係者の意図するところ・方向性を知ることができた。国外では、韓国の「戦争記念館」「戦争と女性の人権博物館」の調査見学・資料収集を行った。博物館研究のなかでも特にジェンダーと戦争の記憶構築を繋げる博物館学（学術雑誌 *New Museology* など）のアプローチや理論・概念について先行研究を網羅した。

戦争メディアを取り巻く博物館・資料館の調査見学、資料分析を組み入れて戦争の記憶とジェンダーについて解釈することにより、「男性性に基づいた日本のメインストリーム・本土＝国の戦争物語・ヒロイズム形成」というメカニズムのなかで、コア（日本本土）vs 辺境（沖縄・北海道）の間の力学がより強化され機能していることが明確になった（コンテキストをみたメディア・テキスト解釈）。

<韓国の戦争マンガのテキスト分析について>

比較のための研究対象とした韓国の戦後制作された戦争映画・マンガの分析については、まず、第二次大戦に関わる戦争映画が非常に稀少であることが明らかになった。

そのため、韓国における第二次大戦関連メディアにおいては、マンガの収集に焦点をあ

てた。「戦争と女性の人権博物館」を訪れた際に「慰安婦」について疑問を投げかけたマンガ・DVDと、ソウルのマンガ専門店にて第二次大戦をテーマ（特にヒトラー・ドイツを扱ったもの）を入手することができ、現在これらの翻訳を行いテキスト分析の進行中である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1) 長池一美、大城房美ほか、「MANGA が女性化する！？ - フィリピンを中心として」、『マンガ研究』20 巻、2013、112 - 151. (査読無)

2) Kazumi Nagaike & Dru Pagliassotti & Mark McHarry, "Editorial: Boy's Love manga special section," *Journal of Graphic Novels and Comics, Special Issue: Boy's Love Manga*, 4, 1 (2013), 1-8. (査読有)

3) Kazumi Nagaike & Katsuhiko Sukanuma, "Editorial: Transnational Boys' Love Fan Studies," *Transformative Works and Cultures*, 12 (2013). (査読有)

4) Kaori Yoshida, "Acquisition of Cultural Competence through Visual Media: Perception of Masculinities in Japanese Society," *Journal of Canadian Association for Japanese Language Education*, 13 (2012), 135-152. (査読有)

〔学会発表〕(計 20 件)

1) Kazumi Nagaike, "Fudanshi (Rotten Men) in Asia: A Cross-Cultural Analysis of Male Reading of BL," Association for Asian Studies Annual Conference, 2015年3月28日, Sheraton Chicago (U.S.).

2) Kaori Yoshida, "Reading manga in the discourse of popular memory," Manga Futures Conference: International Scholarly Conference on Manga, 2014年11月2日, University of Wollongong (Australia).

3) 吉田香織, 「他者のマンガ化：戦争マンガにおける他者表象の動物的描写」日本マンガ学会九州支部第31回例会、北九州漫画ミュージアム、2014年5月10日、(北九州市)。

4) 長池一美 (コメンテーター)、「漫画と戦争の記憶」、日本マンガ学会九州支部第31回例会、北九州漫画ミュージアム、2014年5月10日、(北九州市)。

5) Kazumi Nagaike, "For Liberation and/or Moe?: The Decline of Bishonen and the Emergence of New type of Male Protagonist in Contemporary BL," *Modern Women and Their Comics: Changing Local Identities from the 1960s to 2000s*, 2014年3月24日, Honkong Arts Center (Hong Kong).

6) 吉田香織 (コメンテーター・通訳)「漫画にみる日本幕末史」、日本マンガ学会九州支

部第 29 回例会、2013 年 11 月 23 日、立命館アジア太平洋大学(別府市)。

7) Kazumi Nagaike, “Storytelling in Boy’s ove Manga: An Analysis of the Representation of Foreigners,” Bucheon International Comics Festival, 2013 年 8 月 15 日, BICOF International Conference (South Korea).

8) 長池一美、「アジアの婦女子・腐男子：BL 研究におけるジェンダーセクシュアリティの言説」, 日本マンガ学会第 13 回例会、2013 年 7 月 7 日、北九州市漫画ミュージアム(北九州市)。

9) Kaori Yoshida, “Gendered construction of war memories: synergetic effects between victim, mother, and the abject in Japanese war film,” Popular Culture Association Australia and New Zealand Annual Conference, 2013 年 6 月 25 日, Brisbane (Australia).

10) Kazumi Nagaike, “The Discourse of War in Japanese Shōjo Manga,” Popular Culture Association Australia and New Zealand Annual Conference, 2013 年 6 月 24 日, Brisbane (Australia).

11) Kaori Yoshida, “Gendered construction of war memories: victim, mother, and the abject in Japanese war films,” 立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部フォーラム研究会、2013 年 5 月 1 日、立命館アジア太平洋大学(別府市)。

12) 長池一美、大城房美、事例報告：香港とフィリピンのマンガ状況、九州マンガ交流部会、2013 年 2 月 10 日、北九州市漫画ミュージアム(北九州市)。

13) Kazumi Nagaike, “Fudanshi in Asia: Women’s Manga in Asia: Glocalizing Different Cultures and Identities,” University of Sydney and Women’s MANGA Research Project, 2013 年 1 月 24 日, The University of Sydney (Australia).

14) Kaori Yoshida, “Understanding Japan: Popular Media as a Tool in the Japanese Studies Classroom,” Teaching Japanese Popular Culture Conference 2012, 2012 年 11 月 11 日, National University of Singapore (Singapore).

15) 吉田香織、「女性の戦争責任とメディア表象：戦艦大和の物語をめぐる戦争記憶の構築」, 九州マンガ学会例会、2012 年 10 月 21 日、九州大学(福岡市)。

16) 長池一美、「少女マンガに見られる戦争表象：『少女』の主体性構築の分析」, 九州マンガ学会例会、2012 年 10 月 21 日、九州大学(福岡市)。

17) Kaori Yoshida, “Gendered construction of war memories through postwar Japanese media,” 大分大学国際教育研究センター・国際理解教育講演シリーズ、2012 年 10 月 17 日, 大分大学(大分市)。

18) Kaori Yoshida, “Women, Abjected: the role of women in constructing Japanese national war narratives,” The Center for Japanese Studies Brown Bag Lunch Series, 2012 年 9 月 12 日, The

University of British Columbia (Canada).

19) Kaori Yoshida, “Fantasy and Sexuality of Cosplay in Japanese Girls’ Manga Comics,” Guest talk for Asian Studies course, “Gender and Sexuality in Modern China, Korea and Japan, 2012 年 9 月 10 日, Asian Studies in the University of British Columbia (Canada).

20) Kaori Yoshida, “Invisible Women: Female war responsibility and the construction of war memory through the narrative of The Battleship Yamato,” Asian Studies Faculty & Graduate Students Workshop, 2012 年 9 月 7 日, The University of British Columbia (Canada).

#### 〔図書〕(計 3 件)

1) Kaori Yoshida. Routledge. “Chapter 6: (In)visible Women: Gendering of Popular War Memories through the Narrative of the Battleship Yamato for Six Decades in Postwar Japan,” *Routledge Handbook of Memory and Reconciliation in East Asia*, 2015 (September).

2) Kazumi Nagaike and Tomoko Aoyama. University of Mississippi Press. “What is Japanese BL studies?: A historical and analytical overview,” *Boys Love Manga and Beyond: History, Culture, and Community in Japan*, 2015, 303 (119-140).

3) Kazumi Nagaike, *Fantasy of Cross-dressing: Japanese Women Write Male-Male Erotica*, Brill Academic Publication, 2012, 227.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

吉田香織 (YOSHIDA, Kaori)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：00550386

##### (2) 研究分担者

長池一美 (NAGAIKE, Kazumi)

大分大学・学内共同利用施設等(国際教育研究センター)・准教授

研究者番号：90364992